

平成十五年  
度  
第四十四号

# 赤門合気道

東大合気道部  
赤門合気道倶楽部

高鳥昭憲の死を悼む——ご遺族に、そしてご同僚の  
皆様に

昭和五十年入学

稲賀繁美

畏友、高鳥昭憲の、あまりにも早すぎる死去を遅まきに知り、しばらく言葉もありませんでした。大学を卒業するとともに人生の進路も大きく離れてしまったため、その後会ったことはなかったと思いますし、通産官僚の多忙も思いやられ、また当方があしかけ八年におよぶ海外生活を続けたこともあり、長らく音信も途絶えてはおりました。しかしやがて人生の暮れ方に、またどこかで会う機会も生まれ、若かったころの思いで話にふける日もくることだろう、といった茫漠とした期待が脳裏を離れることはありませんでした。

大学で始めた合気道というものが出会いのきっかけとなりました。赤門合気道部の我々の世代というのは、決して出来のよい世代ではなく、おりからの武道ブームであったにもかかわらず、部の運営においても、入部者数が下降線を辿る衰退期にありました。今日の盛況ぶりからは想像もむつかしい状態ですが、それだけに、というべきか、部内の人間関係には、上下を問わず暖かい家庭的な一体感があり、同学年の関係にも、他の学年と変わらず親密な友情があったと思います。まだ若かったせいも、酒もよく飲みました。井の頭線の駒場の駅前にあった、イタリアン・クウォーターという店が行き着けのスナックで、高鳥は、ノンちゃんという、そのうら若い聡明な女主人にもとりわけ気に入られ、一同なにかと口実があると、週末には稽古のあとで、とぐろを巻きました。午前様どころか、翌朝の一番電車が来るまで一晩延々とサントリー・ホワイトを空け続け、朝もやのなかを仲間たち

「千鳥足がもつれるまま、駒場公園を寮に向かつて「開  
始した」こともありました。今も残っているかどうか、そのころから  
始めた部誌には、毎日のように競って長々とした文章を綴りました。  
もはや読み返すのも恐ろしい青春の記録です。

こうした運動部の荒くれたちのなかで、高鳥という存在は、頭脳の  
切れにおいても運動神経の精妙さにおいても、ひときわ際立っており  
ました。冬の合宿のあいまのソフト・ボールの折りだったか、高鳥投  
手の超スローボールに、手も無くひねられた経験が思い浮かびます。  
しかしそうした自分の卓拔さを鼻にかけることはせず、どこか自分の  
運命にたいして、かすかに皮肉に突き放し、冷めているところがあり  
ました。軽量に泣くことにも自覚はあり、またいささか華奢な体格に、  
内心劣等感があつたのかも知れません。ずばぬけた頭脳をもち、常に  
的確な判断を下しながら、努力を怠らない姿勢は、そうした自分の身  
体的劣勢を補う本能から培われたものかも知れません。器用なだけに、  
それがときに小細工に見えてしまう短所も、おそらくは自覚して、あ  
えて骨太な構想をぶつけてくることもありました。部のなかでは、同  
級に三浪の大男が主将を務めたこともあり、あえて全体の牽引車とは  
ならず、主将の名女房役として、一步引いて補佐を司り、しかし一旦  
事あらば適切な助言を加え、卓抜な実行力を持って、事を成し遂げる  
才能も発揮しました。我々一年生のおりの駒場祭恒例の山車は、山上  
タツヒコの「ガキデカ」でしたが、頭部を完成しただけで土台の設計

を怠っていた当方の間抜けに気づくや、ほんのふた晩で、頑強な土台  
を設計し、ほぼ独力で組み立ててしまったこともありました。もつと  
もこの剛構造は、少林寺拳法部御家芸のダルマの柔構造の前に、あつ  
けなく撃破されてしまったのです。

会話のなかでは仲間たちを引き立てる術を心得ていて、他愛ない冗  
談は尽きる事なく続きました。一種天才肌でありながら、文筆などは  
端正な能書で、書き損じなどなく一筆で、理路整然、実に整った字面  
の紙面を作り上げてゆくのが常でした。共同作戦で同一の試験答案を  
準備しておきながら、高鳥には優がっていたのに、当方は良だった、な  
どという事態まで発生しました。在学中にも怪我に泣かされ、長期の  
休部を余儀なくされ、また卒業間際にも体調を崩して痩せこけてしま  
い、周囲を心配させることもありました。左手を肩のうえに回して、  
いささか捨て鉢の態でカバンを背中にぶら下げ、前かがみでひとりど  
ぼとぼと夕日のなかを去って行くときなど、こいつはなんだか妙な重  
荷と孤独を背負った、さびしい男を演じたのだなど、いささかやる  
せない憐憫の気持を抱かせるものでした。

この一種ニヒルな疲労感を漂わせる風格が、若さゆえのポーズだつ  
たのか、その後家庭をもつて改まったのか、そのあたりのことは、も  
はや知るよしもありません。ただそうした哀感を秘めた聡明な美男子  
が、やや低めの穏やかな声の魅力もあいまって、年上、年下を問わず、

幾多の女性たちにもてなかつたはずもなく、在学中からいくつつかの浮名をやつし、いささかめんどろな問題に巻き込まれたことも、一切ではなかつたことは確かです。でも、優秀な姉上と美しい妹君に囲まれて育つた高鳥は、幼少から女性の心理の機微にもおのずと通じていて、その扱い方にも、本能的といつてよいような氣遣いと洗練がありました。およそ女性にもてせず、第一女性の扱い方にも心得のない周辺の悪ガキどもは、かすかな羨望と嫉妬まじりに、そのダンディぶりを冷やかすくらいが関の山でした。

そうこうするうちに、大学の四年間も終わりに近づきました。高鳥は、持ち前の実力を遺憾なく發揮して、司法試験と上級公務員試験と同時に合格したばかりか、法学部の教授からは、大学に残る可能性をも打診されたと聞いています。結局本人は通産省への奉職を決心したわけですが、その経緯を、一晚酒を飲み交わしながら、詳しく耳にした記憶があります。そのおりの、おそらくは星野先生からの言葉でしようか、體を大切に、けつして若死にだけはするなつて、いわれちゃつたよ、と自嘲まじりに告白したものでした。夭折願望あるいは早死の予感、まだはたちを過ぎたばかりの少年にとつては、いささかナルシステイックな自己破壊願望と裏腹なものです。高鳥の、仲間だけに漏らした、その氣弱な自白には、一種自分の人生に悟つてしまつたような悲しい響きがこもつていて、その場では打ち消しても、この言葉は、澁のように記憶の底によんどんでゆきました。

このたび、遺児育英資金と印刷された封筒を受け取るや、そこに高鳥昭憲の名前に、「故」という、ありうべからざる文字が添えてあるのを見て、一瞬信じられないという衝撃が伝わり、今からはや二十三年も前の、一夜の告白の言葉が、記憶の底から、重々しく響き返して来たものです。いささか感傷に流れた文章を綴りました。ご家族を支える責務の中で、また国の将来を思う思慮のうちに、病床の高鳥が何を考え、何を思っていたのか。重い病に倒れたことひとつ知らず、見舞いに参上する機会も得ず、また見送りの席にも列することを逃した、古い友人として、直接あい知ることもなかつた御遺族の皆様を慰めるにも、よせるべき言葉とてあまりに限られていることを、むなしく、そして残念に思います。その卓越した才能を官僚組織のなかで十分に發揮するには、与えられた時間があまりに短すぎたことは、否定できません。それでもおそまきに、故人が、いつしか幸福な家庭を築く幸せを得ていたと知り、また病床にあつても、かえつて見舞つた人々に励みを与えていたことを聞き、なにかほつと安心しているのも事実です。

律子夫人はじめご遺族の皆様には幸い多きことを祈り、達也君、裕也君、おふたりの御子息の恙無いご成長と将来のご活躍を遥かに願ひつつ、旧友を送る言葉とさせていただきます。